# 平成２８年度えびの市小学校体育連盟実績報告書

１　研究部会名　（えびの市小学校体育連盟）教育研究会

２　役　員　名

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 新　　純一郎 | （加久藤小校長） |
| 理 事 長 | 今　西　隼　人 | （加久藤小学校） |
| 事業部長 | 坂　本　美　香 | （真幸小学校） |
| 研究部長 | 中　山　恵　二 | （真幸小学校） |
| 会　　計 | 田　畑　景　子 | （岡元小学校） |
| 理　　事 | 井　上　　岳 | （飯野小学校） |
| 理　　事 | 関　屋　史　織 | （上江小中学校　小学部） |

３　研 究 目 標

運動の楽しさに触れ、自ら身体能力を身に付けようとする児童の育成

～「できる・楽しい」を実感させるボール運動の指導方法の工夫を通して～

４　年間計画

| 回 | 期　日 | 内　　容 | 会場 |
|---|---|---|---|
| 1 | ４月 | ・年間活動計画検討　組織表作成 | |
| 2 | ５月 | ・授業研究会　指導案検討２本　研究紀要検討 | |
| 3 | ６月中旬 | ・授業研究会　指導案検討　水泳大会打合せ | |
| 4 | ７月 | ・水泳大会前日準備 | 飯野小学校 |
| 5 | ７月 | ・水泳大会運営（予備日：２９日） | 飯野小学校 |
| 6 | ７月末<br>８月初旬 | ・陸上大会打合せ　・準備計画完成<br>・指導案完成２本　・研究紀要原稿完成 | |
| 7 | １１月 | ・陸上大会前日準備 | 飯野小学校 |
| 8 | １１月 | ・陸上大会運営（予備日：１０日） | 飯野小学校 |
| 9 | ２月上旬 | ・年間活動のまとめ・次年度の方向性<br>・九州大会研究発表原稿検討 | |

５　実　　施

| 回 | 期　日 | 内　　容 | 会場 |
|---|---|---|---|
| 1 | ５月２０日（金） | ・年間活動計画検討　組織表作成　研究計画<br>・第１回授業研究会　・水泳大会第１回打合せ | 真幸小学校 |
| 2 | ６月２４日（金） | ・学体研の動向について　・授業研究内容について<br>・水泳大会第２回打合せ | 加久藤小学校 |
| 3 | ７月　７日（木） | ・学体研えびの大会準備 | 飯野小学校 |
| 4 | ７月２６日（火） | ・水泳大会打合せ　諸準備　・学体研準備 | 飯野小学校 |
| 5 | ８月３１日（水） | ・陸上大会打ち合わせ　・研究関係 | 加久藤小学校 |
| 6 | １１月７日（月） | ・陸上大会前日準備　・学体研関連 | 飯野小学校 |
| 7 | ２月上旬 | ・年間活動のまとめ　・次年度の方向性<br>・九州大会研究発表原稿検討 | |

※　上記以外に、学体研関係の臨時理事会を３回実施

## ６　研究のまとめ

### （１）　研究主題

| |
|---|
| 運動の楽しさに触れ、自ら身体能力を身に付けようとする児童の育成<br>～「できる・楽しい」を実感させるボール運動の指導方法の工夫を通して～ |

### （２）　主題設定の理由

えびの市小体連では、平成２５年度から３ヵ年「体力向上研究推進モデル校」の指定校と連動し、児童の体力向上に努めてきた。特に体育授業においては、「運動の楽しさやできる喜びを味わうことができる指導の工夫」を目標に授業の組立てや楽しくできることが実感できるゲームの工夫に取り組んできた。

「できる」については①わかってできる、②かかわってできる、③できることを実感できる、④楽しんでできるという４つをキーワードとし、小中高特のつながりのある研究として、小・中・高１２年間を見通した技能系統表の活用、ＫＯＥＴＡカード(学習カード)、ＩＣＴの活用を研究に組み込んでいる。わかることができることに結び付き、学び合いやかかわり合いができることを高めるはずである。「わかる」「できる」「かかわる」を関連付けながら、児童が楽しくできることを実感できる体育授業の在り方を行うことが、運動の楽しさに触れ、自ら身体能力を身に付けようとする児童の育成につながると考えた。

### （３）　研究の目標

○　「ゲーム」「ボール運動」において、「わかる」「かかわる」ことを関連付けながら、児童が自ら身体能力を身に付けようとする「できる、楽しい」を実感させる指導方法や学習資料の工夫・改善について追究する。

### （４）　研究の仮説

○　「ゲーム」「ボール運動」において、「わかる」「かかわる」ことを結びつけながら、「できる、楽しい」を実感させる指導方法や学習資料の工夫・改善を行えば、児童が運動の楽しさに触れ、自ら身体能力を高めようとするであろう。

### （５）　「できる」ための４つのキーワード

①　わかって「できる」　・体の動かし方やルールやゲームの進め方
　　・運動のポイントや練習の方法

②　かかわって「できる」　・学び合い、教え合い、励まし合い
　　・チームプレー、作戦、ゲーム

③　できることを実感「できる」　・体の動かし方 、運動の行い方
　　・ゲームでの活躍

↓

④　楽しむことが「できる」

### （６）　研究の内容

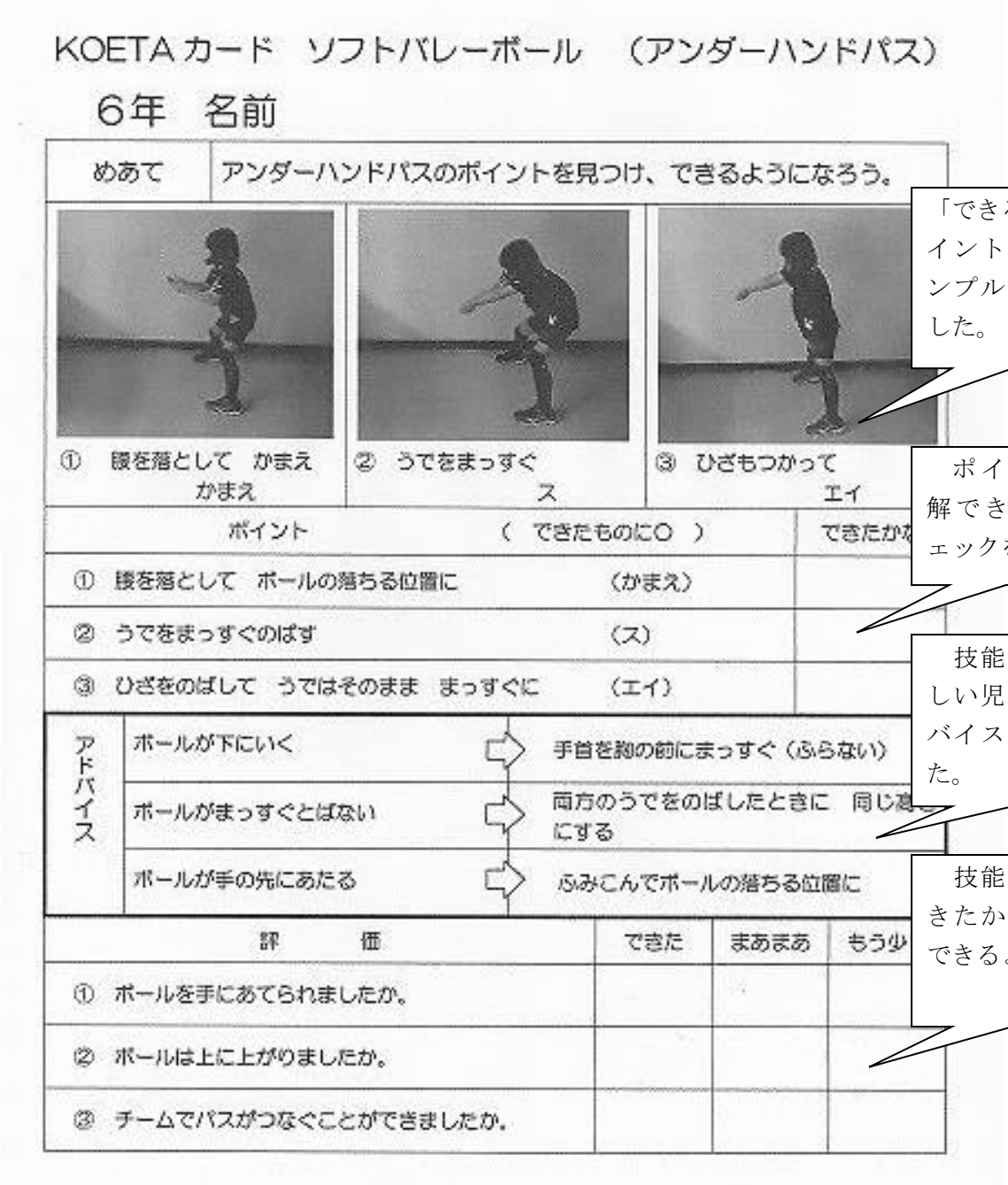
| 指導方法の工夫・改善 | 学習資料の工夫 |
|---|---|
| ⑴　指導内容の明確化<br>⑵　単元全体・一単位時間の授業の流れの工夫<br>⑶　「できる、楽しい」を実感できる指導方法の工夫 | ⑴　KOETA カード（学習カード）の活用<br>⑵　わかる・できる・かかわるためのＩＣＴの活用 |

（７）　研究の実際

【　学習資料の工夫　】

①　KOETA カード（学習カード）の活用

「できる」（運動技能の習得）に焦点をあてたＫＯＥＴＡカードを作成した。技能のポイントは画像を付ける等、児童にとってシンプルで分かりやすいものになるよう工夫した。なかなか技能を習得できない児童に対しても、分かるためのアドバイスを加え、ポイントごとにできたかどうかの評価と、単元後半で身に付けることができた技能を評価できるようにした。



KOETA カード　ソフトバレーボール　（アンダーハンドパス）

６年　名前

| めあて | アンダーハンドパスのポイントを見つけ、できるようになろう。 |
|---|---|

① 腰を落として　かまえ　かまえ
② うでをまっすぐ　ス
③ ひざもつかって　エイ

| ポイント | （　できたものに○　） | できたか |
|---|---|---|
| ① 腰を落として　ボールの落ちる位置に | （かまえ） | |
| ② うでをまっすぐのばす | （ス） | |
| ③ ひざをのばして　うではそのまま　まっすぐに | （エイ） | |

| アドバイス | | |
|---|---|---|
| ボールが下にいく | ⇨ | 手首を胸の前にまっすぐ（ふらない） |
| ボールがまっすぐとばない | ⇨ | 両方のうでをのばしたときに　同じ高さにする |
| ボールが手の先にあたる | ⇨ | ふみこんでボールの落ちる位置に |

| 評　　価 | できた | まあまあ | もう少 |
|---|---|---|---|
| ① ボールを手にあてられましたか。 | | | |
| ② ボールは上に上がりましたか。 | | | |
| ③ チームでパスがつなぐことができましたか。 | | | |

「できる」ためのポイントを画像とシンプルな言葉で示した。

ポイントが理解できたかのチェックを行う。

技能の習得の難しい児童へのアドバイスを書き加えた。

技能の習得ができたかを自己評価できるようにした。

②　わかる・できる・かかわるためのＩＣＴの活用

単元の始めの段階で、児童にゴールイメージや体の動きを理解させるために、タブレットに収録した動画を活用したり、技能の習得の難しい児童に動きの確認を行ったりした。全体や個人だけでなく、ペアやチームにも見せることで学び合いや教え合う姿が見られるようになった。

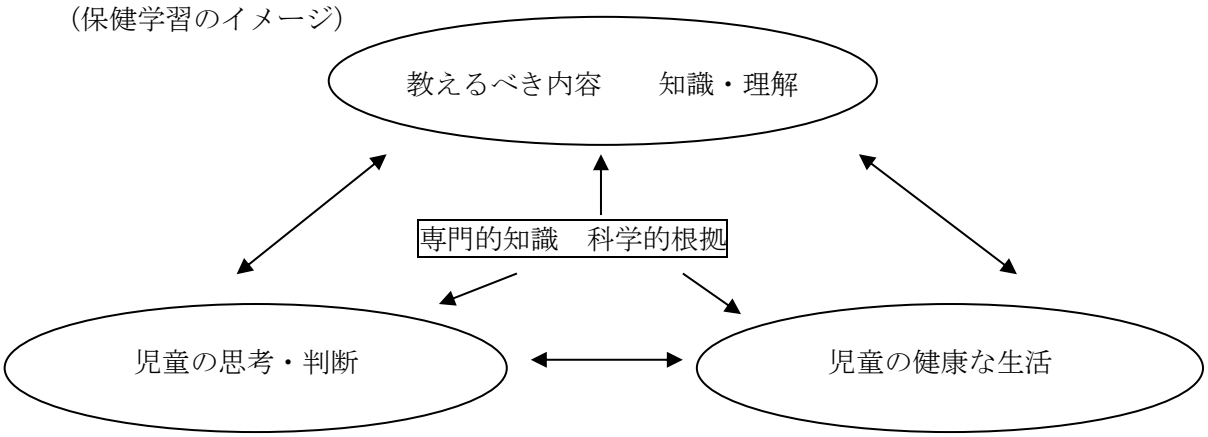
（８）　保健学習の取組

（保健学習の基本的な考え方）

保健学習は、小学校においては、第３・４学年で合わせて８時間程度、５・６学年で１６時間程度行うものとされている。学習時間が少ないが、系統性や教えるべき内容が毎時間明確にされている。

そこで、えびの市小体連において、以下のようなイメージをもとに保健学習を進めることとした。

（保健学習のイメージ）




（９）　成果と課題

○　「わかる」「かかわる」「できる」を密接に関連させた授業を行うことで、基本的な体の動かし方やボール操作をしっかり身に付けさせ、児童にできる喜びを感じさせることができた。

○　ＫＯＥＴＡカードやＩＣＴを活用することにより、児童は「できる」ポイントが分かり、仲間との関わり合いの中で技能を高めることができた。

○　昼休み等に、進んでボール運動に取り組む児童の姿が見られるようになった。

○　保健学習については、児童が科学的根拠をもとに健康の大切さを理解した上で、健康によい生活を送ろうとする意欲が見られるようになってきた。

●　えびの市の各学校をはじめ、小林、高原地区とも連携し合いながら、本研究をさらに深化させていく必要がある。

●　ボール運動以外のどの領域においても「楽しむ・できる」授業の構築を行っていく必要がある。

●　保健学習については、各学校で研修を行い、各学年の系統性を確かめながら保健学習の完全実施

に努めていく必要がある。

７　まとめ

○　今年度は宮崎県学校体育研究発表大会（えびの・小林・高原地区）として、運営と研究の中心を担ってきた。小林・高原地区小体連、県小体連、小中高特別支援学校との協力を得ながら、部会長をはじめ、小体連理事の６名のメンバーで大会をできたことは大きな成果である。

○　水泳大会、陸上大会の運営も無駄のないスムーズな運営がなされた。しかし、県標準記録突破者が少なく、えびの市児童の記録を高めることが課題である。研究内容と結び付くような実践に取り組む必要性を感じている。